国津小児童 田植え体験

名張

名張市神屋の小規模特認校、国津小学校（雪岡正明校長）の児童40人が12日、学校近くの水田でコシヒカリの田植えをした。苗の成長とともに漢字が浮き出る「田楽アート」で、「明」と描いた。

地元農家の協力で、98年からほぼ毎年実施している。「明」は「明るい国津の子になるように」という願いを込め、5、6年生が決めた。

田植えをする子どもたち＝名張市で

文字は縦約35メートル、横約15メートル。6月にはっきり読めるようになり、9月に収穫する予定。収穫した米は給食で食べたり、11月の国津子フェスティバルでおにぎりにしたりする。

子どもたちは近くの農家、山本茂樹さん(80)、池田篤久さん(55)の指導を受けながら、靴を脱ぎ、ひざまで泥だらけになって苗を植えた。6年生の山田知穂さん(11)は「足が泥から抜けなくなった。苗が斜めになったり、曲がったりした」と話していた。

【宮地佳那子】

田楽アート 今年は「明」

名張の国津小で田植え

名張市の国津小で十二日、田んぼの稲で文字を描く恒例行事「田楽アート」の作業が始まり、児童四十人が学校近くで田植えをした。稲の背丈が伸びる六月下旬ごろ、今年の字に選んだ「明」が浮かび上がる予定だ。

学校が借りている近くの水田十二アールで、同市神屋の農業山本茂樹さん(八〇)らの指導を受けながら作業をした。文字の部分が空白になるように、児童たちはあらかじめ張ったビニールテープに沿ってコシヒカリの苗を丁寧に植え付けた。

「明」の字を描くため、田植えに励む児童たち＝名張市神屋で

稲が伸びれば、高台にある学校から文字を眺めることができる。実った米は給食などで味わう。泥だらけになって作業をした四年の南藤萌々花さん(九)は「登下校で文字を眺めるのが楽しみ」と声を弾ませていた。

自然学習など地域の特色を生かした教育をする「小規模特認校」に指定されている国津小では、農業の楽しみや苦労を学ぶため毎年「田楽アート」に取り組んでいる。一昨年は「仲」、昨年は「叶」を描き、今年は児童の発案で「明るく学校生活を送ろう」という意味を込めた。

（河北彬光）